The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語行為と他者の心
Author(s)	堀田, 知子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1980, 13, p. 21-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47785
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語行為と他者の心

堀　田　知　子

0. 序　論　ここでは主に、我々が他人の内的状態(inner state) ―感覚、思考、感情、意志、etc. ―に関して、主張(assertion)、あるいは質問(question) を行う場合のことを問題にしていく。　このような内的状態は人の privacy に属することであり、外側から判断することはむずかしく、本当のことはその感じ手以外にはわからない。したがって、談話(discourse) においては、感じ手が話者である場合、きき手である場合、また第三者である場合によって、言語行為(speech act) を行う方も、またそれを受ける方も、その態度にいろいろな違いが出てくるのは当然のことである。本論ではそうした違いに注目して、これを語用論的な立場から分析していきたい。

まず最初に、ひとつの非常に primitive な原理を導入し、それに基づいて分析を行うことにする。これは、D. Forman (1976)[1] によって提案されたもので、informally には次のように表わされている。

> …people ask question about things that their addressees know about, and they make assertions about things that they themselves know about.

要するに、我々が話者として主張、質問といった言語行為を行う時には、無意識にではあるがこのような原理に従って、無駄なく効率的に行っており、またきき手の方も、この同じ原理に基づいて解釈しているわけである。

この原理は、当然すぎるようにも思われるが、privacy に関する命題(proposition) 等の解釈に際してその果たす役割は重要であり、これからその点を明らかにして、一見この原理と矛盾するかのように思われる表現も、語用論的にみるとやはりその支配を受けており、他の言語現象によってその説明が可能であるということを示していくつもりである。

1. Speaker-proposition と hearer-proposition

1. 1. 定　義　ここで、さらに、やはり Forman の用語である、次のような二つの概念を導入したいと思う。[2]

(i)	speaker-proposition	a proposition about which the speaker has more direct knowledge than the addressee
(ii)	hearer-proposition	a proposition about which the addressee has more direct knowledge than the speaker

これらの用語を用いて先にあげた原理を言い直すと、次のようになる。[3]

A speaker may question only a hearer-proposition, and may assert only a speaker-proposition.

(The Speaker Knows Best Principle)

以後、Forman にならって、これを略して SKB と呼ぶことにする。

ここでは特に、context とは無関係に、常にその内容に関する決定権(authority) が話者にあるものを strong speaker-proposition, きき手にあるものを strong hearer-proposition と呼ぶ。[4]

次に、この SKB を端的に表わす例を示す。

1) (a) ? You feel sick.

(b) ? Am I tired ?

(c) ? I can get you to tell me what time it is.

(d) ? You will take out the garbage.

(a) は、きき手の privacy に属するところの感覚についての叙述で、strong hearer-proposition を主張しており、不自然な表現となっている。(b) は (a) とは反対に、strong speaker-proposition である、自分の感覚について相手に質問しているので、少なくともふつうの疑問文であるとは考えられず、これを受け入れる context は非常に限られる。(c) は文法的には主語は話者であるが、実際にはきき手の意志に関することを主張しており、やはり正常な表現とは言えない。(d) は、不自然とは言えないまでも、このような主張を行っているということは、その行為を遂行するかどうかというきき手の意志に関して本人よりも話者の方がよく知っているという含みをもち、このためきき手に対して失礼な言い方となっている。(a)(b) のように純粋に内面的な感覚だけに関することや、(c)(d) のように人の意志に関する命題は、特に private な性格の強いものであると言えるであろう。しかしながら、形式上、speaker-proposition を質問したり、hearer-proposition を主張しているからと言って、それらが全てこのように容認されにくい表現になるとは限らない。

ここで、主張に対する挑戦(challenge) について、少しふれておく必要があると思われる。

2) How do you know ?

この疑問文は、二通りの意味をもっている。ひとつは、純粋に、知りたいという気持から、相手の主張の根拠を求めている場合であり、もうひとつは、相手の主張に対して挑戦する、いわば pointed question として、疑問・否定の意味をこめて発せられる場合である。Austin (1970)[5] は、これについて、次のように述べている。

'How do you know?' suggests perhaps you don't know it at all.

したがって、strong speaker-proposition の主張に対して、この質問で挑戦することはできない。

3) 'I am tired.'

? 'How do you know?'

1. 2. 内的命題 privacy, つまり人の内的状態に関する命題は、その感じ手が話者であれば、strong speaker-proposition となり、きき手であれば strong hearer-proposition となる。このような命題を便宜上、内的命題とよび、これから種々の内的命題について考察していく。

1. 2. 1. 感覚（その1）

4) (a) I am hot.

(b) You are hot.

(c) John is hot.

(b) は、話者自身の感覚を直接表現したもので、 Russell (1969)[6] のいう、spontaneous sentence (自発文)[7] である。Russell は、主張について次のように述べている。[8]

> Speaking generally, language of the sort that logicians call 'assertion' has two functions: to indicate a fact and to express a state of the speaker.
>
> . . . . .
>
> The question of truth and falsehood has to do with what words and sentences indicate, and not with what they express.

つまり、 真とか偽が云々できるのは語や文が指示する事実についてだけであり、話者の状態については何も言えないというわけである。彼によれば、後者は常に真なのである。

さらにRussellは，2)—(b) のように指示されるものと表わされるものとが同一である文，すなわち自発文を，常に真であると定義した。Wittgenstein も，このような一人称現在形の心理的陳述(psychological statement) は，心理的状態の非言語的，行動的な表現と類似していると述べている。[9]

したがって，2)—(a) は，context とは関係なく常にspeaker-propositionであり，真である（あるいは真でも偽でもない）ということになる。また(c) は，これがspeaker-proposition であるか，hearer-propositionであるか，ということは context に依存しており，逆から言えば，(c)が適格な主張として成立しているということ自体が，これがspeaker-proposition であることの裏づけとなるわけである。問題は(b) である。(b) は，strong hearer-proposition を主張しており，SKBを破っているように見えるが，しかしこれは日常ではごく自然な表現である。これをどのように考えてゆけばよいのであろうか。(a) があるひとつの内的状態を表わしているのに対して、(b)(c) は主語である感じ手の行動、あるいは周囲の状況に基づいて話者が行った、推量的判断を示しており、この場合 'hot' は状態ではなくて態度 (behavior) を意味している。すなわち、(a) と(b)(c) では 'hot' の意味が異なるのである。また、(b)は、この命題の真偽についての決定権をもつ感じ手—すなわちきき手—がその場にいる、という点で、(c)とも異なっている点に留意すべきである。(b) は、(a)(c) のように情報伝達を意図するものではなくて、'I see you are hot.' の意味で、自分が、相手がそういう状態にあることに気付いているということを表わしていると考えるべきである。談話における具体的な例を次に示す。

5) Then gave a quick little shudder. '*You're cold,* sir, come nearer the fire.' —A. Christie

この例からもわかるように、主に見てわかること、観察の結果を表わしており、相手の内的状態の叙述ではない。

日本語で、2)—(a)(b)(c)を表わすと、次のようになる。[10]

(a) 私は暑い。

(b) あなたは暑いのですね。

(c) ジョンは暑がっている。

このように、下線の部分が主語の人称により、三つがそれぞれ違ってくる。日本語では「あなたは暑い」とか、「ジョンは暑い」 といった言い方はしない。これに比して、英語では全て同じ主張形式となってしまうので、(b)もhearer-proposition を主張しているように見える、という日英語のちがいもつけ加えておく。

1. 2. 2. 感覚（その2） やはり感覚に関する命題であるが、今度は次のような例について考える。

6) (a) I see a bird.

(b) Do I see a bird?

(c) Do you see a bird?

6)—(a)は、 話者自身の感覚を表わしてはいるが、 5)—(a)と異なり、外界の事象も入ってきており、Russell 流に言うと、指示されているものと表わされているものとが同じでないので、自発文ではない。(a)において表わされているのは、 話者の「見える」という感覚であるが、指示されているのは a bird の存在である。 (b)は、一見SKBを破っているようにみえるが、 ここできいているのは、 話者の感覚ではなくて指示対象である a bird の存在についてなのである。 つまり、'I see something' ということは、すでに話者ときき手との間で前提(presupposition)としてあり、そのsomething が a bird であるかどうかについての情報を

求めているのである。これに対して、(c)はきき手の感覚についてたずねており、(b)のような前提はない。(b)と(c)は、形式は同じであっても、前提のあり方が違っているといえる。

1.2.3.思　考　次に、know, understand などの思考動詞を検討していく。

7) (a) I don't know the man.

(b) You don't know the man.

(a)は、その男が誰であるのかについて、自分はいかなる belief, 考えももたない、という話者自身の private な状態を表わしたもので、一種の自発文である。これに対して、(b)の方はきき手の状態を述べたものではなくて、男の正体についてのきき手の考えが偽であることを表わしている。換言すれば、(b)は'You know him.'と言えるための前提条件が満足されていない、という客観的事実を述べたものである。日本語では、「知っているとは言えない」、「知っていることにはならない」となるところであって、いわばメタ言語であり、その意味で(a)と(b)はコトバのレベルが違っていると言えよう。(b)が出てくる筋道として、次のようなものが考えられる。

A: I know the man. ——①

He is Mr. Johnson. ——②

B: He is not Mr. Johnson. ——③

So you don't know him. ——④

③によって②が否定され、②の否定が、①の否定に帰着する。相手の考え、belief を知らない場合には、'You don't know.'とは言えず、例えば次のような言い方になる。

8) 'I know you.'

'*You think you do.*'

'No, I'm sure.'——A. Christie

understand についても、know と同様である。

9) (a) I don't understand.

(b) You don't understand.

(a) は話者の状態を表わす自発文であるが、(b) は相手の考えが偽であるという意味で、客観的にコトバの与え方について述べたものである。

このように、know, understand などは、同じ思考動詞のthink, believe などと異なり、private な面(epistemic state を表わす) と、客観的な面(真偽を表わす) とをあわせ持っており、 主語の人称と、言語行為 (主張・質問) との相関関係によって、SKB をふまえて、焦点(focus)の切り換えが行われている。

dream, imagine などの動詞は、真偽の関係は know, understand とは正反対になるが、やはり同じ性質を示す。

10) *You were not dreaming. All* that is quite true. — A. Christie

11) 'Is there something phony about them, or *did I imagine it?*'

'*You didn't imagine it.*' —A. Christie

英語ではレベルの違うものが同じ言語形式で表わされるが、これもSKB によって正しく解釈が行われているわけである。

1. 2. 4. 意志—行為と結果

12) (a) I killed John.

(b) I kill John.

(a) は話者の何らかの行為の結果、 ジョンが死んだという意味で、 その

行為がはじめからジョンを死なせる意図をもって行われたのかどうかは、ここではambiguous である。しかし(b)のような疑問文になると、その二義性はなくなり、意図的な意味の方が消える。 この場合には結果の方に焦点が置かれ、ジョンが死んだかどうかをきいていることになる。意志もやはりprivacy に含まれることであり、自分の意志に関する質問はSKB違反である。したがって、一人称主語と kill, open, hit などの状態変化動詞とが結合する場合、主張においてはその文の意志性は二義的であるが、質問においては無意志となる。後者の例をもうひとつ挙げておく。

13) Was that my fault? *Did I jog your arm?* —A. Christie

surprise, please などの感情的動詞(affective verb) は、主語によってひきおこされた目的語の感情を表わし、決定権は感じ手である目的語にある。このため、目的語が一人称であれば質問が、また二人称であれば主張がSKB違反となる。

14) (a) You surprise me

(b) ? I surprise you.

(c) ? Do you surprise me?

自分の行為が相手に与えた結果だけをきく場合でも、英語は主語にIを立てることが多い。

15) *Did I startle you,* little girl? —A. Christie

16) *Am I interrupting you* now? —A. Christie

このようなところにも、英語の主語型言語としての特徴が表われている。

さらに、perlocution 動詞についても、これと全く同じことが言える。

17) (a) You persuade me to do the job.

(b) ? I persuade you to do the job.

18) (a) You convince me that it is so.

(b) ? I convince you that it is so.

1．2．5．感情

19) (a) You are worried. —A. Christie

(b) You are jealous. —A. Christie

(a) (b) は、相手の心の中を断定的に主張してその privacy に侵入しているが、'You are hot.' の場合と同様に、相手の状態の叙述というよりも態度からの推量的判断である部分が大きく 'I am worried (jealous).' という主張とは、worried や jealous の意味が違っていることに注意すべきである。とは言っても、決定権はあくまでもきき手にあるので、このように privacy に侵入すると、相手から否定や挑戦を受けるおそれも十分にある。

20) (a) *You are worried*. I know when you are worried well enough. —A. Christie

(b) *You're frightened,* Miss Sherwood. You're so pale. —Ellery Queen.

(a) も、hearer-proposition を主張してはいるが、相手のそういう内的状態と、その際外側に表われる兆候(symptom) との関係を知っており、この主張が客観的な根拠を持っていることをつけ加えて、否定・挑戦という相手の反撃を封じている。(b) も外に表われた兆候を述べてその根拠を示している。どちらも客観的な判断のもとに相手の心の中についての主張を行ったことを明らかにしており、これに挑戦するためには、兆候、あるいは兆候と内的状態との関係から否定していくことが必要となるであろう。

21) (a) You are glad.

(b) You are sad.

今度も、相手の心の中の状態を記述しているように見えるが、いずれも周囲の状況から推測して、それが当然のこととして明らかである場合にのみ、

こういう主張が許されるのである。(例えば、入試に合格した→うれしいはずである。身内に不幸があった→悲しいにちがいない、というように。)このようにこれらの場合には、発話の context はかなり限定される。

1．2．6．特殊な疑問文 非常に特殊であるが、strong speaker-proposition を質問することが許される場合として、次のようなものがある。

22) (a) How should I know? —A. Christie

(b) Would I lie to you? —A. Christie

23) 'And what did you do?'

'What did I do?' —A. Christie

22) は修辞疑問文、23) はdouble-barrelled question である。いずれも疑問文としては、例外的とも言えるようなものである。

1．3．外的命題 今度は、内的命題とは反対に、人の外側のことに関する命題を考察する。このような命題は、話者に関するものは strong hearer-proposition となり、きき手に関するものは strong hearer-proposition となる。

1．3．1．兆候

24) (a) You look worried. —A. Christie

(b) You sound doubtful. —A. Christie

look, sound, seem などの動詞は、直接相手の心の中に侵入せず、その心の中をのぞく手がかりとなる兆候を表わすときに用いられ、これに対して否定・挑戦を行うことはできない。また、ふつうは自分自身については言

えないが、次のように不確実性を表わす語や句と共起する場合や、視点を自分の外側に置いて自分自身を客観化し、一般論として述べる場合には、自分の外側に表われる兆候に関しての主張を行なってもおかしくない。

25) (a) { I think / Maybe } I looked a little startlle.

(b) I look young in this new dress.

1. 3. 2. 評価 right, wrong は、他者の態度に対して評価を与えるものである。したがって、自分に関しては strong hearer-proposition となるので、right, wrong を云々することはできない。

26) (a) ? I am right.

(b) You are right.

(c) Then I am right. —A. Christie

(c) は、周囲の状況から客観的に推論を行っている。つまり、自己を客観化し、視点を外側に移して主張を行なっており、こういう特殊な場合には、自分について述べることが許される。right, wrong の他に、kind, helpful, convincing なども同様の性質を示す。[11]

2. 主張か質問か hope, believe, think, suppose などの weak assertive[12] は、一般に hearer-proposition と結びつくことが多い。

27) (a) I hope I'm not intruding. —A. Christie

(b) I do not think you have quite finished. —A. Christie

(c) And I suppose you know all about everyone in Dillmouth ? — A. Christie

(d) I hope you learned something? —A. Christie

(a)(b) は形式からすると陳述文であるが、自分の心の状態を表わしているだけでなく、きき手からの何らかの反応を期待している。また、(c)(d)は、文全体の意味は strong speaker-proposition を表わすにも拘らず、形式上は疑問文となっている。(a)(b) と (c)(d) は、このように陳述文と疑問文という、明らかな形式上の違いを示しているが、機能の点から見れば、その違いはほとんどないように思われる。いずれも yes((b) の場合はno) という答えを期待して、それを先取りして、埋め込み文に表わされた hearer-propsoition を speaker-proposition として扱ってもよいかどうかを確認しているのである。この(a)〜(d) は、イントネーションも微妙で、その機能は主張とも質問とも決めにくく、両者の中間に位置づけられるような言語行為であると考えられる。

28) a) '*You don't seem to mind.*'

'Well, I don't really.' —A. Christie

b) '*You seem surprised.*'

'I am.' —A. Christie

c) '*You seem very gay mon cher?*'

'Gay? I am steeped in misery—wallowing in gloom.'

—A. Christie

これらの例も 27)と同様、陳述文、疑問文という形式上の違いは実際の機能とはあまり関係がなく、いずれも話者が相手のそういう兆候に関心を持ち、注目しており、それを本人に確認したいという気持を表わしている。言わば外側から、相手の心の中を探っているわけであるが、これらもまた主張と質問の中間的な発話であると言えよう。

29) (a) I *see you're not wearing mourning*, Mrs. Hudd?'

'I haven't got any.' —A. Christie

(b) '*You're up late this morning.*'

'I slept late.' —A. Christie.

(c) '*You haven't said anything,* Mr. von Deinim?'

'I am a foreigner. I do not know your English police.' —A. Christie

上に挙げた例は全て speaker-proposition であるか、hearer-proposition であるか決められないほど、またその必要もないほど明白な事実についての発話である。例えば(a)において、相手が喪服を着ていないということは、見ればすぐにわかることで、わざわざ口に出す必要のないことである。それを敢えて指摘しているところに、Grice (1975)[13] のいう conversational implicature が生ずるのである。すなわち、その状況においては変だ、異常である、という、話者の驚きの気持を表わし、相手にその理由の説明を遠回しに求めているのである。理由もまた privacy に属するものであり、いきなりそこに立ち入るのを避けて、まずわかりきったことに言及し、その内容自体よりも、発話の動機の方を問題にしてくれることを期待している。(b)(c)についても同様である。そして、この29)の場合もまた、文法形式が陳述文であるか、疑問文であるか、ということは、その意味や機能にさして影響を及ぼさない。

このように考えてくると、主張とは、また質問とは何であるのか、この二つの言語行為の本質的な違いはどこにあるのか、また陳述文、疑問文という文法形式との関係はどうであるのか、というところにまで、問題が及んでくる。SVの語順と、下降調のイントネーションをとっている場合に、何をもって主張、あるいは質問という illocutionary force を決定するのであろうか。ここでもSKBがはたらくことは言うまでもない。すなわち、Forman[14] も述べているように、それが speaker-proposition を表わしていれば assertion (declarative) であり、hearer-proposition

を表わしていれば質問であると解釈される。

しかし、question を、Bolinger (1957)[15] の言うように、'request for a verbal or other semiotic response' であるとするならば、修辞疑問が疑問文の形式をとりながらその機能は主張に近い、とされているように、形式は陳述文であっても、そこに表わされた命題の内容によっては、質問とも受け取ることができるものもある、ということを、27)—(a)(b), 28)—(a)(b)は示している。また29)のような例の扱い方は、依然未解決のままである。

これまでの考察により、一見単純明快な主張と質問との区別は、実は非常に複雑な問題を含んでいることがわかる。ここでは紙面の制約もあるので問題提起だけにとどめ、これ以上の議論は差し控えることにする。

3. 結　論　本論では、他人の心の中は知り得ない、という事実が、主張、質問という言語行為の構造や解釈に、どのように表われており、またどのような制約を加えているか、という問題を考えてきた。これは、とりも直さず、他者の心の動きを扱う際の話者の knowledge belief と、きき手の knowledge, belief との相関関係についての議論である。

我々は、自分自身の内的状態について主張する場合は、絶対的な決定権をもち、他人からそれを否定されたり、How do you know? と挑戦されることはない。これに対し、他者の心の中のことについての叙述を行なう場合には、様々な制約を受ける。特にそれが談話の場にいるきき手についてであれば、さらに慎重にならざるを得ない。ＳＫＢを厳密に解釈すれば、きき手の内的状態に関する主張、あるいは、話者自身の内的状態に関する質問は許されない、ということになる。しかし、実際には、一見、ＳＫＢに違反しているにも拘らず、何ら不自然でない表現は枚挙にいとまがない程である。この事実は、ＳＫＢの欠陥を示すものではなく、いままで

見てきたように、これには意味機能の変化、コトバのレベルの違い、視点の移動、特殊な context などの種々の要素が関与しており、むしろ SKB の妥当性を裏づけていると言ってもよかろう。

このように、我々は、話者として常にきき手の knowledge, belief を考慮しながら主張、質問などの言語行為を行い、また、きき手として、話者の knowledge, belief を考慮しながら、発話の解釈を行っているのである。

さいごに、SKB についての考察をすすめていくと、主張・質問という概念を、語用論的視野に立ってもう一度考え直す必要があるということを指摘するに到ったが、これについては、また別の機会を待つことにしたい。

注

(1) D. Forman, "Speaker Knows Best Principle," *CLS*, 10, 1976. pp. 162—176.

(2) Ibid., p. 164.

(3) Ibid., p. 170.

(4) この「強さ」は絶対的なものではなく、程度の違いがあると考えてよい。

(5) J. L. Austin, "Other Minds," *Philosophical Papers,* Oxford Univ. Press, 1970.

(6) B. Russell, *An Inquiry into Meaning and Truth,* Penguin Books, 1969.

(7) Ibid., pp. 203— 204.

(8) Ibid., p. 201.

(9) これについては原典不明。なお、N. Malcolm, "Knowledge of Other Minds." *Readings in Semantics,* Univ. of Illinois Press, 1974, pp. 443— 454 参照。

(10) 寺村秀夫「感情のシンタックス」『言語』Vol. 2. No. 2参照。

(11) 評価を与える副詞（句）についても、全く同じことが言える。

(12) J. B. Hooper, "On Assertive Predicates," J. P. Kimball ed. *Syntax and Semantics* No. 4. Academic Press, 1975. pp. 91—124.

(13) H. P. Grice, "Logic and Conversation," J. P. Kimball ed. *Syntax and Semantics* No. 4. Academic Press, 1975. pp. 41—58.

(14) Forman, ibid.

(15) Bolinger, *Interrogative Structures of American English; the Direct Question*, The Society by Univ. of Alabama Press, 1957.